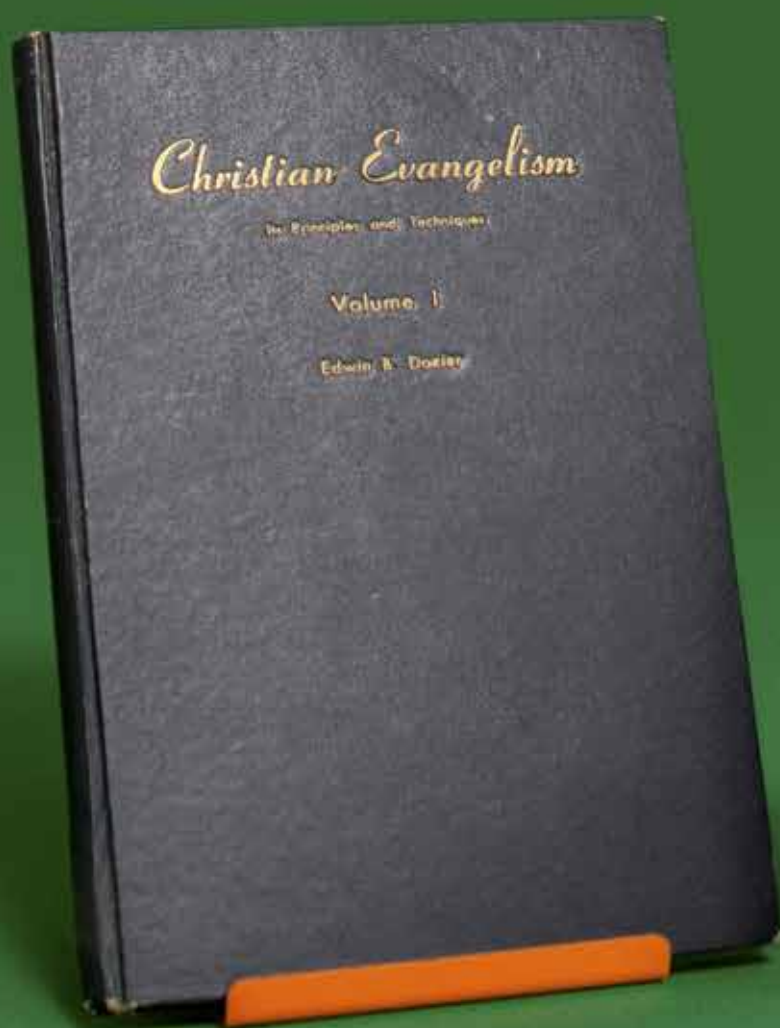




# 館報

SEINAN GAKUIN  
UNIVERSITY  
LIBRARY BULLETIN  
2016. October No.181



## 1 仙厓逍遙(その四)

図書館長 古田 雅憲

## 2 研究ノートから

「核時代の到来を予言した作家—H. G. ウェルズと世界国家」  
文学部 英文学科 教授 一谷 智子

## ブラウジングルーム

「臨床心理学を学ぶために」人間科学部 心理学科 講師 小川 邦治

## 3-4 新図書館建設に向けて

第7回 図書館の様々なサービスとIT活用  
図書情報課 小川 ゆきえ

## 5-6 データベース紹介

House of Commons Parliamentary Papers  
法学部法律学科・法科大学院 教授 小山 雅亀  
JapanKnowledge 図書情報課 永津 庸史

## 7 蔵書ギャラリー no.22

「キリスト教の伝道学」  
西南学院史資料センター事務室  
アーキビスト 出口 智佳子

仙厓さんが亡くなったのは天保8(1837)年10月7日のこと。御年数えて88歳、天保大飢饉のさなかのことだった。当時、仙厓さんの愛した宝満山麓・筑紫野あたりも厳しい凶作に見舞われたようで、人々はカシの実、クズの葉、ヨモギ、イシズキ、コベなどを食べて飢えをしのいだという(\*1)。博多市中の窮状も同様だったろう。頼みの黒田藩はと言えば、天保4(1833)年から始めた財政改革がハイパーインフレを招来して藩札は大暴落、博多経済は混乱の極みにあった(\*2)。飢饉に苦しみ失政に翻弄される博多町衆の姿、それを間近に見る仙厓さんの胸の痛み。

仙厓さんをさらに追い詰める事件が生じた——天保7(1836)年、自らの後継と頼んだ愛弟子・湛元等夷(たんげんとうい、聖福寺第124世)が、藩と対立した末に大島流罪となってしまったのだ。愛弟子を失った仙厓さんは87歳の老躯に鞭打って、再び聖福寺住職として立った。仙厓さんの死は翌年初冬のこと、寺の内外ともに辛い最晩年だったに違いない。

禅僧が末期に記す詩句を遺偈(ゆいげ)と言う。仙厓さんのそれは聖福寺に伝わっている——「来る時来る処を知り 去る時去る処を知る 懸厓に手を撒せざれば 雲深くして処を知らず 末後の句」と言う(\*3)。その意は難解で専門家の間にも諸説あるが(\*4)、今の私には——「生まれてきて初めてこの世のことを知ったごとく、あの世のことも死んで初めて分かろうというもの。この険しい崖にしがみついているその手を放してみないことには、遙か崖下の様子など、深い雲に包まれたまま知れようはずもなかるうに」と聞こえる。「経典をどんなに読んでも、言葉をどんなに費やしても悟りの境涯は見つかるまい、まずその身を以て感じ取られよ」と言われている気がするのだ。いわゆる「教外別伝 不立文字」。禅の極意である。もともと「不立文字」とは

言いながらそれじたい言葉なのであって、考えてみれば禅とは「語りえないものについて語ろうとする行為」に他ならない(\*5)。

それに関して興味深い図像がある——いわゆる「渡唐天神図」(\*6)と呼ばれる一葉である。石村コレクションには「太宰府天神図」と言う(\*7)。「渡唐天神」とは天神信仰の一態として室町期の禅林で広く語られるようになった説話——博多・崇福寺にいた円爾(えんに、聖一国師)の夢に天神様(菅原道真公)が現われて、ぜひにも我に禅を授けよと望むので、聖一国師が宋国第一の大禅師たる無準師範の名を挙げたところ、天神様はにわかに渡海入宋してこれに師事し、やがてめでたく衣鉢を授かったのだとか。

ここに描かれた天神様、なるほど

中国風の長道服に身を包み、頭には仙冠を戴いていらっしやる。右腰に下げたおいでの物は、師匠から賜った衣鉢を入れた袈裟袋ということだろう。図像全体、世に知られる多くの「渡唐天神図」と同様だが、仙厓さんの描く天神様はやはり優しげだ。ふさふさ眉毛に口ひげ顎ひげ、静かに目を瞑っておいでのお姿はあたかもお能の老神のごと穏やかに、しかし真一文字に結ばれた口許は毅然として。袖うち合わせ、背をやや屈めては軽く会釈しておいでらしく、思わず此方もご挨拶を返してしまいそうだ。手にされた梅花一枝から芳香がふっと漂う。

画賛に「天下梅花の主、扶桑文字の祖。之を賛するはまた難しきかな。鎮西太宰府」と言う。仙厓さんは「高潔孤高の士にして本邦漢詩文の第一人者たる道真公、この方を今また言葉で賛することはいかにも難しい、かたがた、この九州太宰府の地で御自らお感じあれ」と賦したのである。「日本一の漢詩人」と称される言葉の達人・菅公が「不立文字」の境涯を欲したとする説話じたいがユーモラスだが、その図像に「賛をしようにも言葉がない」と付けたところがいっそう可笑しい。これまた「不立文字」の表れか。

さて博多町衆の間に面白い口伝がある——いよいよというとき、弟子たちが仙厓さんに最期の教えを請うた、「御師、遺偈を我らに」。それに応えて仙厓さん「死にともない」とただ一言。大禅師の末期の言葉としてはあんまりだということで弟子たちが再考を勧めたところ、仙厓さん「ほんまにほんまに」とさらに重ねたのだとか(\*8)。もつとも上に示したように、仙厓さんは立派な遺偈を述べていたのだ。が、それは弟子たちにはたぶん伏せられていた。中山喜一朗さんの言うとおり(\*9)、その書に「末後句」とわざわざ付記されているのは、仙厓さんの死後、お部屋の整理をする弟子たちがそれと気付くようにとの配慮に他なるまい。だとすれば「死にともない、ほんまにほんまに」と言ってみせたのは、仙厓さん最後の茶目っ気なのだ。「死にともない」などと遺されて困惑している弟子たちが後に本当の遺偈を見出して感涙にむせぶ姿を、仙厓さんは草葉の陰からのぞき見て「してやったり」と何々大笑——仙厓さんならきつとやる、そう思うと何だか晴れ晴れと愉快な心持ちになる。

## 参考文献

- (\*1) 筑紫野市山口地区山神に伝わる末岡文書に記す。筑紫野市歴史博物館(ふるさと館ちくしの)webページ内「ちくしの散歩82 飢えとのたたかい」による。
- (\*2) 安川巖著「物語福岡藩史」文献出版、1985(開架(2層)219/1/102B)
- (\*3) 辻惟雄著「江戸の宗教美術:円空・木喰/白隠・仙厓/良寛」日本美術全集23、学習研究社 1979(大型本 開架(2階)708/0/46-23)など諸書に影印あり。
- (\*4) 衛藤吉則著「仙厓の遺偈に関する一考察」倫理学研究11、P.47-66(広島大学倫理学研究会)1998(開架(7階))
- (\*5) 永橋治郎著「禅と言葉の問題について:鈴木大拙を手掛かりとして」人間文化科学研究集録7、P.33-43(大阪府立大学大学院 人間文化科学研究科・総合科学研究科)1998(開架(7階))
- (\*6) 長谷洋一述「渡唐天神図について」2005.10.22開催「河内国府遺跡里帰り展」講演の記録(関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター編「河内国府遺跡里帰り展」2006)
- (\*7) 福岡市美術館編「仙厓 石村コレクション」石村萬盛堂、2005(開架(4階)721/7/21)
- (\*8) 新郷好太郎編著「仙厓和尚逸話」後藤商店印刷部、1906の巻末に「追記」としてこの話を伝える。禅文化研究所編著「仙厓和尚逸話選」禅文化研究所、1998にも詳しい。
- (\*9) 中山喜一朗著「仙厓の○△□:無法の禅画を楽しむ法」弦書房、2003(開架(4階)721/7/22)



※図版…福岡市美術館蔵(石村コレクション)「太宰府天神図」(9-B-35)

## 核時代の到来を予言した作家 —H・G・ウェルズと世界国家

文学部 英文学科 教授 一谷 智子

英文学を学んだことはなくとも、『タイム・マシン』や『透明人間』、『宇宙戦争』といったタイトルをどこかで聞いたことがある人は多いだろう。作者は、「SFの父」といわれた英国の小説家H. G. ウェルズ(Herbert George Wells)。19世紀末期から20世紀前半にかけて、批評家、歴史家、政治思想家、社会活動家としても多彩な活躍をした「知の巨人」である。

このウェルズのあまり知られていない作品に『解放された世界』(The World Set Free: A Story of Mankind)という小説がある。1914年の出版当時から一般読者はおろか批評家にさえ覚えがめでたくなかった本作は、核分裂という物理現象がまだ現実のものとはなっていない時期に核時代の到来を予見し、核戦争の惨事を克明に描きだしたという点で「世界初の原爆文学」として再評価されて然るべき作品である。本作に触発されたハンガリー系ユダヤ人物理学者レオ・シラードが、アインシュタインを通して米国政府に働きかけたこと



で、原爆開発が始まった史実に鑑みれば、ウェルズこそが原爆の生みの親だったと言えるのかもしれない。

しかし、ただ「生みの親」と非難するなら、彼の真意を理解したことはならないだろう。ウェルズが『解放された世界』に描いた原爆は、人類を破滅の危機に陥れる究極の破壊兵器で

あっただけではなく、戦争の愚かさや国家主権による政治の限界に気づいた人々が世界国家の樹立に向かう契機を得るためのアレゴリーでもあったからである。ウェルズは、第一次世界大戦への悔恨から、戦争を根絶するために国際連盟の創設を提案し、人類共通の歴史認識や普遍的知性を体系化しようとした。『解放された世界』は、そうした彼の平和構想に先駆ける青写真のような作品だったといえる。

ウェルズの平和構想は、様々な形で大戦後の世界に影響を与えたが、原爆を実際のものとして経験した日本の戦後の歩みとも深い関わりをもっている。本学の図書館の閉架書庫にひっそりと並ぶ『世界国家』や『世界連邦運動二十年史』を続けば、戦後の日本で世界連邦建設運動を推し進めたキリスト教社会運動家の賀川豊彦や物理学者の湯川秀樹などが、平和実現に向けた世界連邦思想の源流にあるウェルズの存在に熱いまなざしを注いでいる。

戦後71年を経た現在、私たちが生きる世界は、大戦後に平和を創り出そうとした人々が求めた方向性に逆行しているようだ。平和は人類の悲願であり続けているにもかかわらず、世界連邦思想について考えることが多くの人の関心の対象となることはない。第二次世界大戦後の不戦の誓いに端を発する欧州統合の歩みも、英国のEU離脱によって試練の場に立たされ、テロへの恐れ、移民や難民への排斥主義から、世界各地で再びナショナリズムが台頭している。世界国家など夢物語だと思われるような時代だからこそ、ウェルズの一連の書物を手に取ってみたい。もうひとつの世界の姿が立ち現れるはずだ。

1: H. G. Wells, *The World Set Free* (London: HGW Classics, 2011). 日本語訳には浜野輝訳『解放された世界』(岩波文庫、1997年)がある。[開架(2階)091/933/76]/2: 世界連邦建設同盟編『世界国家』第1巻-8巻(緑蔭書房、1947年-1955年、復刻版)[開架319/805/3-1~7]/3: 世界連邦建設同盟編『世界連邦運動二十年史』(世界連邦建設同盟、1969年)[開架319/8/176]

## ブラウジングルーム

### 臨床心理学を学ぶために

人間科学部 心理学科 講師 小川 邦治

教壇に立って一年半、学生からはいろいろな質問を受けてきました。中でもコンスタントに繰り返される、少し厄介な質問が「臨床心理士になりたいのだが、どんな本を読んだらよいか」です。

臨床心理士だからこそ統計や実験計画に強くなってほしい。ハウツウも大事だが、ハウツウの通用しない現場で活躍できるタフな人になってほしい。人に対する温かい眼差しを育ててほしいし、何よりも言葉に対する感覚を養ってほしい。こんなことを考えていると、結果として多読乱読を勧めたくなるのですが、これでは回答になっていませんね。

ではどんな本がよいのだろうか?という気持ちで今回図書館を訪ねました。私が学生だった頃と比べると、心理学の書籍も随分とバラエティに富んでいます。日本人による著作はびっくりするほど多いし、「学生の頃にこんな本が出ていたらなあ」と思うようなものも多いのです。しかしながら、「学生に勧める」という視点で本を探すととなかなか難しい。現場に近い実践的な良書は、ハウツウ本のように「軽く」映るかもしれませんが、原理原則に終始したり、人を援助することに直接つながらないものは、思索には向いているでしょうが実際的ではありません。

書棚には私が学生の時に会った本も



何冊も見つけることができました。その中で今回紹介したい本が「21世紀の心理療法(Ⅰ)(Ⅱ)」(セイク編、成瀬悟策監訳、誠信書房)です。1970年代から80年代にかけて、アメリカでは様々な心理療法が創始されました。その創始者達が集まって行った、自らの心理療法についての講演をまとめたものです。創始者の個性と各心理療法の特徴の重なりを垣間見ることができて面白いし、心理療法がいかにバラエティに富むものかを感じ取ることができるでしょう。

「日本人にとっての心理療法」を理解するための最良の本は何かと考えていたら河合隼雄先生の本が2冊、目に留まりました。今回はそのうちの1冊、「心理療法入門」(河合著、岩波書店)を紹介します。この本は「入門」であるにも関わらず現場を経験してから読むとなお理解が深まるというすごい本です!平易な文体ですが決して安易ではなく、心理療法の本質を理解することができ、かつ心理臨床の現場をイメージすることもできるのではないのでしょうか。

この原稿を書いている今、新図書館が姿を現しつつあります。本学の新しいシンボルになるこの建物が、学生のための「生きた図書館」になってほしいと心から願っています。

#### 参考文献

J.K. セイク編著、成瀬悟策監訳『21世紀の心理療法(Ⅰ)(Ⅱ)』誠信書房、1989 [開架2階 146/8/7-1~2]  
河合隼雄『心理療法入門』岩波書店、2002 [開架2階 146/8/249]



# 新図書館建設に向けて

第七回

## 「図書館の様々なサービスとIT活用 ～ただ今貸出はできませんが、資料集めをサポートできます!～」

図書情報課 小川 ゆきえ

正門横に建設中の新図書館。全ての外観が見えるようになり間もなく完成です。この原稿を皆さんがお読みになる頃には、本や雑誌など所蔵資料の引越し作業が始まっている予定です。

ところで、図書館が引越し作業をしている間、図書館の本は貸出ができません。2016年10月から2017年1月まで、図書館の資料を使いたい方は、館内で読んだり、必要個所のコピーを取ったりしてお使いください。また、2017年2～3月は完全閉館いたしますので、入館することもできません。ご迷惑をおかけいたしますが、来春の新図書館開館のための大切

な作業ですので、どうかご理解ください。

しかしこのままでは、来春まで学生の皆さんの「学び」に必要な資料がそろえられない!という事態になりますので、この期間も、図書館では全力を上げて皆さんの資料探しをお手伝いいたします。以下に主なサービスをご紹介します。貸出ができない逆境を逆手に取って?!この機会にぜひ、図書館の様々なサービスを体験してください。

(この本文中の@以下で表示している内容は、それぞれのデータベースやWebサイトへのアクセス経路を示しています。)

### 1. 福岡市の公共図書館を利用する

まず、最も単純明快な方法として、公共図書館の利用をお勧めします。福岡市の公共図書館で最も規模が大きい総合図書館は、福岡市博物館の隣、福岡タワーの手前にあります。また、分館の1つである早良図書館は、地下鉄藤崎駅に直結した駅ビルの中にあります。総合図書館は本学から徒歩約10分、早良図書館は約15分の距離です。本学の学生の皆さんにとって、両図書館共、アクセスしやすい公共図書館と言えるでしょう。本学の学生証を提示することで、福岡市在住でない方でも利用カードを発行してもらえます。

公共図書館の蔵書は、一般市民の方の生涯学習を支えるための蔵書ですので、本学図書館の蔵書とは多少傾向は異なりますが、皆さんにとっても有用な資料

も多く所蔵されています。これまでも、本学所蔵の本を他の人が借りているが早急に利用したいという学生さんへ、総合図書館で所蔵されている同じ本をご案内したことが何度もあります。福岡市公共図書館の蔵書は、総合図書館のWebサイトから簡単に検索できます。



@図書館HP> [データベース](#) >  [図書館](#) にチェックを入れて [表示](#) をクリック>

福岡市総合図書館> [蔵書検索](#) (本をさがす)

### 2. 他大学から本やコピーを取り寄せる

本学図書館では提供できない資料を、他大学から取り寄せるサービスがあります。通常は、送料やコピー代がかかる有料サービスですが、2016年10月～2017年3月までは無料でこのサービスを受けられ

ます。近くの公共図書館にも所蔵がなく、データベースでも本文が公開(※詳細は5.参照)されていない資料は、このサービスをご利用ください。MyOPACから申込みができます。

@図書館HP> [蔵書検索](#) > [MyOPAC ログイン](#) > [利用者サービス](#) >

[文献複写・貸借申込み](#) > [著作権法に関する注意事項を読み](#)  [同意します](#) にチェック>

[申込](#) > [必要事項を記入](#) > [申込](#) > [内容を確認し](#) [申込を確定する](#) をクリック

### 3. 他大学の図書館を利用する

2.の取寄せサービスもありますが、直接他大学の図書館に行って資料を見たりコピーを取ったりする方法もあります。中には、本の貸出をしている大学図書館もあります(九州大学附属図書館、九州産業大学図書館など)。他大学の図書館を利用する場合は、事

前に先方のWebサイト等で利用条件や開館時間を確認してください。本学の学生証を提示すると、簡単な手続きで入館できる図書館もありますし、紹介状が必要な図書館もあります。紹介状は本学図書館のカウンターにて発行いたします。



## 4. データベースを使って本の情報を調べる

読みたい本の内容を知るには、その本を手にとってパラパラと読んでみるのが一番ですが、それができない場合、次の方法を試してみてください。公共図書館や他大学の図書館を訪問する前に、この方法で程度本の内容をチェックできる場合があります。

### ■OPACの目次情報を読む

本学図書館のOPACの画面で、**目次**の欄に記載がある本がヒットしたら **続きを読む** をクリックして、目次情報を開いてみてください。[あらすじ]、[目次]、[著者略歴]など、ここを読めば、タイトルだけの情報と比べてより詳しくその本の内容を知ることができます。本連載第六回「自動書庫と資料検索」でもご紹介しましたが、概ね1985年以降に出版された本にはこの情報が付いています。この目次情報が付いている本の多くは、新図書館では自動書庫に入庫する予定です。OPACから目次情報を読み取る習慣を身につけておくと、新図書館での本の検索もスムーズにできるようになります。

### ■WebcatPlusで調べる



WebcatPlusは全国の大学図書館が所蔵する本を、一度に検索できるデータベースです。このデータベースの検索結果にも、目次情報が付いているものが多くあります。また、**+ 連想検索** の機能を使うと、単語ではなく文章で検索することができ、その文から連想される本を表示してくれます。例えば「世界で一番住みやすい都市について」という文で検索すると、都市に関する本、住みやすさに関する本、住宅に関する本、まちづくりに関する本などが表示されます。本学図書館では所蔵していない本もヒットしますので、興味ある分野の文献情報を集めるのに効果的です。

@図書館HP> **データベース** >  **図書館** にチェックを入れて

**表示** をクリック> Webcat Plus

## 5. データベースを使ってWeb上で論文を読む

本学図書館ホームページからアクセスできる様々なデータベースで検索すると、Web上で論文を読むことができる文献がヒットすることがあります。このような文献は、探している資料そのものが手元になくても、パソコンの画面上でその資料の中身を読むことができますので、大変便利な機能です。

タイトルをクリックしてください。この論文にアクセスするの欄に黄色い四角で囲まれたアイコン や などがあれば、本文をWeb上で読むことができます。

### ■CiNii Articles (サイニアーティクルズ)



日本語で書かれた学術雑誌の論文記事を探す時は、まずこのデータベースにアクセスしましょう。検索して読みたい論文が見つかったら、その

@図書館HP>データベース>

画面下方の **契約データベース** の **雑誌論文** > CiNiiArticles

## 6. データベースの講習会を受講する

上記でご紹介したデータベースですが、イマイチ使い方が分からない、という方もおられるかもしれません。そこで図書館では、データベースの講習会を開催する予定です。データベース会社のインストラクターの

方が来館され、便利な機能をご紹介します。図書館のスタッフが説明する日も設けます。日程・内容等の詳細は、図書館のホームページやSAINSポータルにてお知らせいたしますので、チェックしてみてください。

## 7. 読みたい本のリストを作る

新図書館の開館に向けて「読みたい本リスト」を作っておくのはいかがでしょうか。

### ■OPACの「タグ付け」でリストを作る

9月に更新された本学図書館のOPACには、新しく「タグ付け」機能が追加されました。OPACの画面右上に、**MyOPAC ログイン** のボタンがあります。そこからログインした状態でOPACで検索し、読みたい本が見つかったら、その本の情報画面で **+タグを追加する** という表示をクリックしてください。「レ

ポート用」「読みたい小説」など、自分の好きな名前タグを保存できます。一度保存したタグの名前は、別の本をタグ付けする時にも使えます。タグを1つ以上保存すると、OPACの最初の画面にタグの名前が表示されますので、それぞれをクリックすれば、OPACの画面がそのまま本のリストとして使えます。

### ■文献管理アプリRefWorks (レフワークス) でより幅広い文献リストを作る

上記のOPACのタグ付けで管理できるのは、本学図書館で所蔵している本だけですが、「文献管理アプリRefWorks」を使うと、様々なデータベースで検索した資料もリストとして管理できます。学内のネットワークに繋がっているパソコンから、下記のアクセス経路を辿ってRefWorksにアクセスすると、IDとパス

ワードを設定でき、無料で使うことができます。一度IDとパスワードを設定すれば、その後は学外からもアクセスできます。RefWorksは、本、論文、Webサイト、写真、電子ファイルなど、様々な文献の情報を一度に管理できるアプリですので、学修用から趣味の情報まで、使い方を広げることができます。

@図書館HP>OPAC>画面下方の **関連** > **- 文献管理アプリ(RefWorks)**

図書館で本の貸出ができない期間にもご利用いただきたいサービスをご紹介しましたが、いかがでしたでしょうか。図書館のサービスのことで分からないことがあれば、どうぞお気軽に図書館のスタッフに質問してください。

図書館ホームページからアクセスできるデータベースは、新図書館開館後ももちろん継続してアクセスすることができます。新図書館ではPC貸

出サービスを実施する予定ですので、館内の好きな席で、様々なデータベースにアクセスできるようになります。また、アクティブゾーン(仮称。本連載第五回「図書館に滞在する」参照)において、6.のようなデータベース講習会を、定期的実施できないかを検討中です。新図書館の開館まであと5カ月。本連載第1回「西南学院大学図書館の歴史」でご紹介した図書館の歴史に、新たな時代が加わる日が近づいてきました。

DATABASE

# データベース 紹介

今回のデータベース紹介は、少し専門的になりますが、英国下院議会文書のデータベースであるHCPP (House of Commons Parliamentary Papers) と、約50種類の辞事典、叢書、雑誌が検索できる国内最大級の辞書・事典サイトのJapanKnowledge (ジャパンナレッジ) です。

データベースは情報の宝庫です。図書館には、他にもいろいろな分野のデータベースが揃っていますので、是非アクセスしてみてください。

## House of Commons Parliamentary Papers (HCPP)

法学部法律学科・法科大学院 教授 小山 雅亀

アクセス方法：図書館HP>データベース>契約データベース(法律)>House of Commons Parliamentary Papers (HCPP)

本データベース(以下“HCPP”と呼びます)に収録されているのは、主として18世紀以降——最も古いものは1660年代(名誉革命より前!)の資料をも含んでいます——2004年までにイギリスの下院が関係した議会文書です。イギリスの議会も公的資料を公開していますが、現時点では通常の方法でアプローチできる(ネットで閲覧)のはほとんどが1997年以降であるため、それ以前の資料を参照する必要がある場合にはHCPPは有用です。

筆者はイギリスの刑事手続を主たる研究対象としていますが、研究の視点は、イギリス法の現状分析を通して我が国の問題点を分析するための視座を得る、というものであるため、ここでは20世紀の部分に限り説明を加えます(もちろん歴史を遡った分析も必要であることは言うまでもありません)。ちなみに、イギリス法とくに「議会主権」といわれる議会の任務と権限がほぼ固まるのは、17世紀後半といわれていますが、その後も個別的な変化は続いています。

HCPPの20世紀以降についての部分は、資料を年度ごとに、法案(Bills)、議会討議資料(Command Papers)、下院議会文書(House of Commons Papers)に分類して収録しています。「議会討議資料」とは、聞きなれない言葉かもしれませんが、国王(すなわち政府)の命令(Command)により政府から議会に提出される文書のことを意味し、議会での討議の材料として政府の計画や試案を述べる「緑書」(Green Paper)や、提案する法案について政府の政策を述べる「白書」(White Paper)も議会討議資料の一種です(以上、小山貞夫編『英米法律用語辞典』(2011年)を参考にしました)。

普通の(法)学部生にとっては、HCPPを利用しなければならない必要が頻繁に生じるとは思いませんが、研究者(あるいは研究者を志す者)なら、立法の経緯や立法者意思を認識しておくことは不可欠です。近年において、我が国でも大きな法改正がなされるにつれて、国会の議事録やそれに先立つ法制審議会での議論を押さえておくことが不可欠であるとの認識が強まっています。筆者自身、1985年に成立したイギリスの検察官制度を調査するために、約25年前に初めてイギリスに留学した際に、毎日のように長時間かけて議会討議資料や議会の議事録(Hansard)をコピーして(もちろんその後読んでいた)ことが思い出されます。今なら、HCPPのようなデータベースを利用すれば、コピーまでは簡単にできるようになりました。しかし、そこから得られる膨大な資料をどのように活用するのかは、各人の努力にかかっているという現実は変わることはありません。



▲検索画面

## JapanKnowledge (ジャパナレッジ)

図書情報課 永津 庸史

アクセス方法：図書館HP>データベース>契約データベース(辞書)>JapanKnowledge

誰もがスマートフォンや携帯電話を持ち、時間や場所を問わずWeb上に溢れる膨大な情報に簡単にアクセスできるこのご時世、意味の分からない用語を入力してその意味や由来をWeb上で調べた経験が一度はあると思います。ただ、そのWebから得られる情報がどれだけ「確かなもの」か、意識している方はどのくらいいるのでしょうか。

今回ご紹介するジャパナレッジは約50種類もの辞書・事典、叢書、雑誌を横断的に検索できるデータベースです。見出し項目約13万、総索引語約50万の「日本大百科全書(ニッポニカ)」をはじめ、「日本語大辞典」、「国史大辞典」、「現代用語の基礎知識」、「日本人名大辞典」、「プログレッシブ英和中、和英中辞典」など、日本語、外国語、人名、固有名詞…幅広い領域を網羅しています。さらには一部の叢書や雑誌記事まで一緒に検索できるのでから、このデータベースがどれだけ便利かを語る必要はないでしょう。

この量的な特徴に加え、更に注目していただきたい点が、質の面でも優れていることです。収録されている一つひとつの辞事典等がこれまでその分野で信頼され引用されてきた有数の文献であることから、いかに質の面で保証されているかは自明なことですが、せっかくですので私の体験談をひとつ。

先日映画を見ていると、「モンタージュ理論」なる言葉が登場しました。モンタージュという単語は分かるものの、どんな理論かはよく分からず、早速Google検索をしました。言葉の意味を解説するページやコラムが山ほど出てきて、その場である程度の概要を理解するには十分過ぎる情報量でした。しかし、ふとその情報たちがどれだけ「確かなもの」なのかを意識したとき、その情報の殆どが、誰が発信しているのか、どの情報源から得たものなのか分かりませんでした。そこでジャパナレッジで同じく検索をしたところ、得られた情報の内容はWeb上で知り得た内容の

再確認したいなものでしたが、参考文献一覧や出典元、その情報の執筆者(発信者)の氏名も明確に記載しており、その情報が「確かなもの」であるとスッと納得できました。さらには、これまで知ることのなかった「フォトジェニー論」といった映画理論の関連語も芋づる式に見つけ、興味の赴くままに「確かな」情報を追いかけて思いがけず知識が深まりました。

Webには新鮮な情報、専門的な情報、マニアックな情報…様々な情報があり、日常でさっと調べ物をするにはこれほど便利なツールはありません。しかし、大学生や社会人になると調査研究やレポート、プレゼンテーションなど、より「確かな」情報が必要とされる場面が多くなってきます。みなさんが「確かなもの」を求めるとき、Webとの使い分けの一手段として、ぜひジャパナレッジにアクセスしてみてください。



▲モンタージュ理論の詳細。  
ドラッグした単語の意味をポップアップ画面で表示できる「Knowledge Searcher」という便利な機能もあります。



## E. B. ドージャー『キリスト教の伝道学』

Christian Evangelism - Its Principles and Techniques [開架(5階神学部) 195/21/D89c(1)]



『キリスト教の伝道学』



日本バプテスト連盟のロゴが入ったタイトル



第5章「伝道者とそのメッセージ」



エドウィンのサインが入った見返し

Christian Evangelism - Its Principles and Techniques (『キリスト教の伝道学—その原理と方法』)は1963年、西南学院の第9代院長E.B.ドージャー (Edwin Burke Dozier, 1908-1969, 以下、エドウィン)によって発表されました。エドウィンは、西南学院の創立者C.K.ドージャー (Charles Kelsey Dozier, 1879-1933)の息子で、父親と同様に南部バプテスト派の宣教師でした。学院の神学部で「伝道学」の科目を教えており、授業の教科書とすることを目指しましたが、英文であったため使用には至りませんでした。本書の見返しには、「西南学院の神学部へ 感謝とともに エドウィン B. ドージャー」という言葉とサインが残されており、エドウィン自身が、学院の神学部へ寄贈したことがわかります。タイトルの頁には、「キリスト教の伝道学」という題の下部に、開いた聖書に日本列島が描かれた象徴的な日本バプテスト連盟のロゴが付されています。第1章では「信仰復興運動と伝道の定義」、第2章「伝道史」、第3章「伝道の神学」、第4章「伝道における心理学」、第5章「伝道者とそのメッセージ」で構成され、伝道学の概論がまとめられています。エドウィンは、「伝道学」を非常に重視し、「伝道学を周辺の問題としている牧師は、二流にとどまる」というほどでした。

本書を遺したエドウィンは、日本バプテスト連盟と西南学院にとって、大きな存在でした。1908年、長崎の出島で生まれ、高校卒業まで日本で過ごします。米国サザン・バプテスト神学校で修士課程を修了した後、1932年から宣教師として日本伝道に従事しました。1941年に日米関係の悪化のため一時、帰米しますが、1946年、アジア・太平洋戦争後の日本で、再び宣教師として働きます。エドウィンは、戦後、日本における南部バプテスト派の教会の復興に尽力し、日本バプテスト連盟の組織や連盟の信仰宣言をまとめるにあたり主導的な役割を果たしました。また、外国伝道局 (ミッション・ボード) に西南学院への援助を求め、米国の宣教師を来日させる準備を進めました。1965年から第9代院長を務めるものの、1969年の学生運動の取捨にあたっているなか、狭心症によって逝去しました。

『キリスト教の伝道学』は、当時の南部バプテスト派宣教師がどのような理念で伝道活動を捉えていたのか、キリスト教を教育の基本理念と

する学院でどのような「伝道活動」を実践していたかを推察することができる資料です。第5章で語られた「3. 伝道者におけるいくつかの望ましく必要なもの」という項目では、伝道者は、キリストへの信仰の他に、「主のような憐みの心を持つこと」や「救い主に向かって、我を忘れ、喜んで愛をささげること」(p. 214)が必要であると説いています。これらは、「神と人ともに誠と愛を」というエドウィンが学院に残した言葉にも繋がるものです。「神と人ともに誠と愛を」は、「西南よ、基督に忠実なれ」という建学の精神を言い換えたもので、「愛するということは、どこまでも信じることであり、望みを失わないことであります。すなわち、誠意を尽くす、ということでもあります。一愛とは無償の行為です。無償の行為だからこそ、愛は厳しく、強く、そして、人生の究極の目的へと我々の目を開かせてくれるのです」\*1と語っています。エドウィンが、愛を以って西南学院で働き、キリスト教教育を進めていったことを示しています。

『キリスト教の伝道学』は、西南学院大学図書館の他に、東京神学大学図書館に1冊所蔵されており、日本の図書館で所在が明確になっているものとしてはこの2冊に限られています。学院関係者の資料は大学図書館をはじめ、10月22日に開館した西南学院史資料センターでも収集を進めていきます。資料センターは、学院史資料を収集保存、検証し、公開していくことを目的として設置されました。学院の理念や歴史を振り返ることによって、今後の西南学院の歴史を紡ぐ糧となる施設をめざしています。

\*1 『西南学院新聞』第7号、1969年7月7日より引用。



西南学院史資料センター [西南学院百年館(松緑館)1階]

## 編集後記

いよいよ来年4月には新図書館が稼働します。もうすぐです。今までとは別次元の環境が整い、これまで以上に様々な用途で利用することが可能になります。今後、図書館が資料提供の場から、より多目的な用途に対応できる場として発展していく可能性を感じます。

新図書館を活かすのは、そう、あなた次第です！

図書館スタッフも応援します。

(M.W)

## 西南学院大学図書館報 No.181

2016(平成28)年10月31日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番92号

TEL (092) 823-3426

<http://www.seinan-gu.ac.jp/library/>

図書館報バックナンバー (No.153~) も上記サイトに掲載しています。